
ツァイトさんの異世界冒険記

filo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツァイトさんの異世界冒険記

【Nコード】

N4358Y

【作者名】

fillo

【あらすじ】

異世界にトリップしてしまったら、勇者でもなく召喚されたわけでもなかったら、その世界でどう生きる？——“俺”はこんな風に生きてます。

異世界トリップをしてしまった元・女性による、美少年まつたり(?)異世界ライフ物語。基本友情モノ。女↓男と性転換してますが女性っぽさのない男性キャラに仕上がってると思います。 ”ツァイトさん”の視点から、異世界ファンタジーをのんびりお楽しみください。 自サイトのほうにも掲載しています。 / / 話が進むと戦闘が出てくるようになるの

で、念のため「R15」「残酷な描写あり」の警告タグをかけています。

0001：目が覚めたら別人になっていました。

ああ、最悪だ。

目が覚めてまず思ったのはそんな事だ。

視界を遮るほどの大雨が四肢の全てを濡らして、呼吸すら難しい。まるで溺れているかのような気分で、薄暗い森の中、泥まみれの地面を蹴るように歩いた。

体が重い。もう寒いってレベルじゃない。滝のような水が常に背中叩いてるんだ、もう訳がわからない。

歩いてても歩いてても、細い木に当たるばかりで、一向に何処かに辿り着ける気がしない。

いやそもそも、此処は何処なんだ。

事の発端。まずそれもよく分からない。

目が覚めたら既にこの雨。雨でぐしゃぐしゃになった泥と雨水の溜まり場に横に転がっていて、混乱したまま取り合えず一心地つける場所を探して彷徨い始めた。

こうなる以前の事も、よく覚えては居ない。普通にベッドに寝たような気がするし、夜に散歩に出かけていたような気がする。

でもそれにしたって、こんな場所は住んでいる近所には無かったはずだし、日本で此処までの豪雨は台風が来た時ぐらいなものだ。でも住んでいた場所は台風の直撃は少なく、ここまで酷くなったことはほとんど無い。というかなったらテレビで大騒ぎになっている。

コンクリート多くて水捌け悪いからな。

それに、この雨が台風によるもの何だとしても、この降り方は可笑しい。

台風となれば、強風が伴うはずだ。それがこの雨には無い。真っ直ぐに空から落ちてきている。

（せめて）

せめて、何処か休める場所があるなら、ひと心地つけるだろうに。出会う木々は細く痩せていて、その癖ひよろりと真っ直ぐに高い。葉も普通の木々よりも少なく、雨宿りすることも出来ない。

そうして悪態すら満足につけないまま彷徨うこと、暫し。霞む視界の中、はつきりと動く人影を見かけた時は、特に信仰しても居ない何処かの神に感謝の祈りを捧げたくなった。

「たあゝすうけてえゝ…くださッ」

ゾンビよろしく、両手を上げて泥と水で重い足を無理矢理動かし、駆け足で人影に近づこうとしたのが悪かったのだろう。

人影に助けを求め切る前に、手前の水溜りに潜んでいた木の根っこに足を引っ掛け、大きな泥溜まりに顔から突っ込んで意識を失った。

ああ、最悪である。

「お姉ちゃんって、女っぽくないよね」

何時だったか。いや何時もだったか。

自分には双子の妹と弟、それに兄が居る。父と母の家族計画では、長男長女に後子供一人が理想だったらしいのだが、どういう巡り会わせか、末の子供は双子で生まれてしまったために、我が家は大家族となった。

とはいえ兄は出来た人間であるし、双子も元気で明るく、そして世の中を生き抜くには十分なくらいのずる賢さを持ち合わせており、要領のいい兄弟に囲まれているお陰か大きな喧嘩や陰険な雰囲気は無く、家族の仲は近所さんから花丸を頂くほどにとてもよい。

そんな中、時折双子から言われるのがさっきの言葉だ。

女っぽくない、と言われて、怒るでもなく素直に肯定する様を見て、寧ろ怒るのは兄の方だ。

「何処がだ！こんなに可愛い妹は他に居ないぞ！」

「私も妹だよ！」

「お前は可愛い双子の片割れだからいいんだ」

「差別だー！」

「いや論点ずれてるから、2人とも」

漫才のようなやりとりをする妹と兄を見て、冷静なツツコミを入れるのが弟だ。ちなみに自分はそんな兄弟達の姿を見て和んでいるタイプである。いやだって、可愛いじゃないか？

「まあでも、お姉ちゃんが女っぽくないのには同意だな。かつこいいお兄ちゃんがいる感じ」

「そうそう！大きいお兄ちゃんよりも頼りになるよ、絶対！」

「何だと？」

「きゃー！いぢめかつこわるーい！」

「じゃれてる2人は放っておいて。別に姉さんが女っぽくないのが駄目、っていう訳じゃないからね。それが姉さんらしいってハナ

シ。……嫁の貰い手に困るかな、っていう不安はちよっぴりあるけれど、もしそうだったら僕が引き取ってあげるから」

「お兄様、私の片割れがアブナイ発言をしているのですが、どうしたらいいと思います?」

「うん、そうだな。取り合えず引き取るのは俺の役目だ、と言っておこう」

「駄目だこのシスコン兄弟!!」

いや取り合えず、自分で生きていけるから。多分。

ふ、と賑やかな声が響く暖かな夢が遠退くのを感じて、目をうつすらと開いた。

何処だろう。何となく覚えがある。そうだ、家族でキャンプに行ったとき、小さなコテージを1つ借りた事があった。その天井によく似ている。

小さく空気を吸い込むと、ほんのりと木の香りがした。

ざあざあという音に、部屋に一つある窓に目を向けると、外ではまだ雨が降っているようだった。

どれだけ降れば気がすむんだ、というやや呆れた気分で体を起こし、部屋の中をぼうつとした頭で観察した。

小さな部屋だ。やたらもこもこしたベッドが一つと、引き出しが4つあるチェストが一つ。チェストの上に鉄製のボウルと水差し、乾いたタオルが一枚と、ガラスのコップが1つ。ベッドの傍には丸椅子が1つ置かれていて、壁にはいくつかの風景画が飾られていた。その風景画に見覚えは無く、何処かのヨーロッパの山岳風景といった様子だ。

まるで病人に対していたようなその部屋の様子に、ふとベッドの枕元を見れば、ややくたびれたタオルが一枚、ぼてりと落ちている

のに気がついた。なるほど、自分は熱を出して寝込んでいたようだ。誰だか知らないが、親切にしてくれたようだ。お礼を言わなければならぬ。

夢の余韻から出そうになるあくびをかみ殺し、するりとベッドを降りる。素足に、雨でほんのり水気を吸っている木の床がひんやりとした。

この冷たさで目が覚めそうだなと思いつつ、ひたひたと頼りなく歩いて、部屋に2つある扉の内、ベッドの足元側にある扉に手をかけた。こげ茶色に塗られた重たそうな扉だったが、以外にも扉はすんなりと開いて、すぐに扉の前に居た人影を映し出した。

「あ、もしかして、この家の……」

人ですか、と問いかけかけて、残りの言葉は空気に溶けて消えてしまった。

鏡だ。大きな長身の人間を映し出すことの出来るくらい大きな姿見が、扉をあけて直ぐの壁に貼り付けられていた。

なるほど、朝起きて服を着替えて、この鏡を見ながら身支度を整えるのだらう。いやいや、感心している場合ではない。

この鏡に魔法なんて幻想的な代物がかかっていないのであれば、この鏡は今の自分を映していることになる。

それはつまり、この鏡に映っている美少年が、今の自分であるという事だ。

銀よりも濃い、白の髪。何処までも澄み切った鮮やかなアイスブルーの瞳。整った顔立ちに、すらりとした手足。

性別さえもひっくり返った、まったくの別人になってしまったというのに、自分がとった行動といえば、その鏡の前で顎に手を当てて、ポーズをとる事だった。

「うん、カッコイイ」

後から考えると、かなり間抜けな行為だったと思う。いや、そういう考え全て吹き飛ぶくらい、清清しいぐらいに別人で、そして格好良かったんだ。

寧ろ前よりもしつくりくるんじゃない？等と考えつつ、ぺたぺたと頬に手を当てたり、色々な角度で見たりと鏡の前で遊んでいたら、啞然とした様子でこちらを見ている金髪碧眼の美少年が佇んでいるのを見つけ、へらりと笑ってみた。

「やあ。この家の人？」

それが後に親友となる、レガートと交わした、最初の言葉だ。

0002:…どうやら此処は異世界らしい。

シュリユッセル。それがこの世界の名前らしい。

この世界はとても力満ち溢れる豊かな世界で、剣あり、魔法あり、モンスターありのまさしく幻想の冒険物語のような世界だ。

1000を越える国があり、50を越える大陸が存在し、1000を越える種族が存在する。

聞けば精霊という存在も居るし、神のような存在も滅多に会えないけれど実在しているようで、少し旅をすれば冒険譚が作れてしまえそうな世界だ。

じゃあ何で地球の日本生まれな自分がそんな世界に居るのかというと、簡単に言えば、自然災害のようなものなんだそうだ。

元の世界の方で何処かに空間の切れ目とかズレとかが生じて、かなり低い確率でそこに人が落ちてしまう事がある。落ちてしまったも大抵は元の世界に引き寄せられ、その落ちていた間の事は夢であったと思ったり、デジャヴを見たと感じたりするらしい。

だが稀に、元の世界と離れてしまい、別の世界に落ちてしまうことが在る。これが神隠しというやつだ。

そして自分が落ちた先が、たまたまこの世界、シュリユッセルだったというわけだ。

そこまではいいとしても、じゃあ何故姿かたちが変わってしまった

たのか、という疑問に、あの土砂降りの中助けてくれた美少年ことレガートが、この世界の仕組みや性質について教えてくれた。

曰く、この世界はとても個性豊かな”性格”を持っているのだという。

この世界は、自分の中のものに対してはとても甘く、どんどん溢れる豊かな力を注ぎ与える。その枯渇することの無い力は、他世界から羨ましがられるほどだ。

だが、自分が生み出したものではないもの、自分の中で生まれたものではないものに対しては、過剰とも言える拒絶反応を起こすらしい。

混ざり合うのも嫌だ。入ってくるな。そんな子供のような叫びはとても強い力となって、その外部の物質を消し去ろうとする。それは一種の、この力を持ちすぎる世界の防衛手段なんじゃないかな、ともレガートは言った。

その防衛手段に抵抗しようとするのが、シュリユッセルに落ちてきてしまった、自分のような異世界人だ。

消えたくない、消されてたまるか。そんなこちらの魂の力と、シュリユッセルの力がぶつかり合い、結果、魂は元のままに肉体がシュリユッセルの世界のものに作り変えられる、という現象が起きる。その現象が、落ちてきた異世界人の姿が変わってしまう理由だと言っ。

「作り変えられた肉体は、魂をベースにもっとも良いものに作られるから、以前より丈夫であつたり、これ以上無いぐらい自分にしっくりくる身体になったりするらしいよ。逆に以前、とても魔力が高かったり、武術を極めに極めていたりしたら、弱くなったと感じることもあるみたい」

「なるほどな。言わば身体のリセットみたいなものだもんなあ」

暖かなココアのような飲み物のお代わりをレガートに渡され、お礼を言いながらそれを受け取る。それにレガートは柔らかく微笑むと、向かいの席に座った。

「他に『落ちた異世界人』の共通点は？」

「そうだな…大体の人は、不老長寿かな。中には普通に年をとって亡くなっていくこともあるらしいけれど、大抵は老いないし、長命だと思う」

「なるほど？まさか自分がピーターパンになるとはね」

「ピーターぱん？」

地球でも有名な永遠の少年の名前を思い出して笑ってしまうと、レガートが不思議そうに小首を傾げるのをみて、何でもない、と笑って見せた。

「んじゃあ簡単にまとめると、こういうことか。その1、姿がシリユッセルによって作り変わってしまったので、まず元の世界には戻れない。その2、もしかしたら物凄い力を秘めているかもしれない。その3、さらに不老長寿であるかもしれない、と」

指をひとつひとつ折りながらレガートに確かめるように言うと、彼はこちらよりも真剣な表情で頷いた。その様子に、思わず微笑んでしまう。

レガート・クロツシエラ。

優しい金色の髪を持ち、深く鮮やかな碧眼を持つ16歳の美少年。深い山の中に祖父と2人で暮らしていたが、つい2ヶ月ほど前にその祖父が亡くなってしまい、今では一人暮らしをしているという。

この時期、この辺りには滝のように雨が降る時期があり、その雨

が降っている間でしか取れない花や薬草等があつてそれらを取りに出ているらしい。危険なんじゃないかと尋ねると、水の精霊が起こしている現象なので洪水などは起きないんだそうだ。ファンタジーって凄い。

しかし彼が採集に出ているくれたおかげで自分は彼に助けられた。どうやら2日間も熱を出して寝込んでいたようだ。彼には感謝するばかりだ。

それから起きて動き回れるようになった3日目、彼に事情を話すと『落ちた異世界人』の話をしてくれた、というのがつい先ほどの話し。

レガートはとてもいい奴だ。山小屋で外界と離れ、ひっそりと暮らしていたからなのかやや物静かではあるけれど、暗いというよりも寧ろ明るい。話す言葉も丁寧で、中々に博識だ。彼を育てた彼の祖父に、一度会ってみたかったなと思う。

この山によくなるという木の実で作った甘く優しいココアのような飲み物、ロツコをのんびり飲みながら、天井を見上げる。思うのは、どうしようかな、という思いだ。

考える仕草をしたのに気がついたのだろう。レガートの視線が、気遣うものになる。

ほんと、イイヤツだよ。レガートは。

「なあ、レガート。どうしたらいいと思う？」

視線をレガートのほうに戻し、にっと笑顔を浮かべて見せると、レガートの表情が少し難しそうな表情になる。

そんな彼が何かを言う前に、考えていた続きの言葉を紡いだ。

「 ”俺” の名前」

一度も使ったことの無かった一人称を使ってみて、なるほど、と思う。これはしっくりくる。

何処かきょとした様子のレガートに思わず笑みが零れつつ、指先でテーブルの上に適当に文字をなぞった。

「ほら、要するに今の俺って、生まれ変わったみたいな感じだろ？ならいつそそう考えちゃおうと思ってさ。だから名前も、新しいものに」

こちらに来る前、何をしてたのかよく覚えてない。もしかしたら死んだのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。

ただ願わくば、愛するあの兄弟や両親の目の前で消えてないといと思う。

元の世界への未練は大いにあるし、出来れば帰りたいと思うけれど、既に帰り道は無くなっているのだから、せめて。

遠く離れた彼らに心配させないように、元気で生きていたいと思う。

新しい名前は、そのための第一歩。

忘れるわけじゃない。捨てるわけじゃない。

進むための、大事な一歩。

につこり微笑む俺を見て、レガートはどう思ったのか暫しびっくりした様子でこちらを見た後、少し困ったように微笑んだ。

「君って……。ううん、何でもない。じゃあ、こういう名前はどうか」

レガートは持っていたコップを置いて、傍にあった背の高いチェ

ストからメモ用紙と鉛筆を持ってきた。少しごわごわしたそのメモ用紙を俺に見えるように置いて、すらすらと綺麗な文字を書いた。

「うん？何て読むんだ？」

身体が作り変えられたときに組み込まれたのか、シュリユッセルで使われている大抵の言語は話す事が出来るらしい。だが話せるだけで、文字を読んだり書いたりというのはきちんと学ばなければならぬ。

小首を傾げる俺に、レガートは柔らかに微笑んで、鉛筆で書いた文字を指差しながら、ゆっくりと発音した。

「ツァ・イ・ト。ツァイト、『時を刻む者』という意味だよ。どうかな？」

ツァイト。うん。

「いい名前だ。気に入ったよ。ありがとう、レガート」

こうして、俺、ことツァイトさんの異世界冒険記は始まりを次げたわけだ。

0003：冬が来るそうです。

レガートと今後の事を相談した結果、このまま此処でレガートと暮らしていくことになった。

何処かに行くにしても文字が読み書きできなければ旅は難しいし、こちらの世界の事を知っておかなければならない。

俗にゲームで言うモンスターのような存在、この世界ではノートリアスというらしいのだが、それらだってあちこちにうろつろしている。身を守る手段を身につけなければ、何処かに行くのはかなり難しいことだと、レガートに論されたのだ。

それに、年が近い友人というのは中々出来なかったし、住人が増えて自分も嬉しい、と花が咲かんばかりの笑顔で言われてしまえば、頷くほかに無いだろう。

レガートはイヤツだが、同時に可愛いヤツでもある。おにーさんは下界に行った時のレガート君が実に心配です。

レガートの住んでいる辺りは、この豪雨が終わった後、直ぐに冬に入るらしい。

冬に入ってしまったえばこの辺りは雪が降るので、容易に外に出れなくなる。だから雨が止んだら、直ぐに蓄えを補充して冬籠りの準備をしないといけないんだそうだ。

そう、レガートは山小屋で祖父と2人きりでひっそりと暮らしていた。という事はその食料、特に肉などは、自分達で調達していて

いるという事だ。

つまり、レガートは狩りをする人間というわけだ。

朝起きたら、よく眠れた？とにこやかに微笑みながら、その、解体作業する爽やか美少年を見て、皮のある段階からの解体作業に耐性の無い俺が失神しかけたのは無理も無いことだと思う。ああ、うん、分かってる。慣れないといけないよな、うん。魚を捌いてると思えばいいんだよな、うん！

ふらふらしながらも、なんとかレガートくんのらしく 解体講座！の第一回を乗り切った俺は、朝食もそこそこにレガートに小屋の事を教えてもらった。

そう、発見がある。この小屋、意外に大きいのだ。

物が多い所為かこじんまりとした雰囲気の調理場と打って変わり、正面の玄関から居間へと続くエリアがとても広い。暖炉があり、暖かな毛皮が敷かれ、丁寧に作られた大きなソファは寝転がると最高だ。それから祖父が使っていた大きな寝室と、レガートの部屋があり、さらに物置とお客が来た時用の、俺が寝ていたあの小さな個室と、書斎がある。2階、というか屋根裏部屋もあって、そちらは作業場兼物置となっていた。

さらに地下エリアがあり、その地下は二分されていて、片方は調理場からは地下へと続く道があり、そこはひんやりとした食物の貯蔵庫になっている。もう片方は冬などには部屋が暖かくなるように魔法具が設置されており、冬場でも鍛錬をおろそかにしないように剣を振り回せるぐらいの訓練兼物置スペースとなっていた。

うん、カンペキに定住する気満々な作りの家だ。もう小屋とは呼

ばない。きちんとした家だこれ。

冬の間は、一番大きな寝室である元・祖父の寝室で一緒に寝ることになった。冬の間調達しづらい薪や墨はとても貴重なため、同じ部屋で1つの薪ストーブを使うことでその使用量を減らすのだ。一緒に寝たほうが暖かいし、と笑顔を浮かべるレガートの頭を思わず撫でかけてしまったのは余談である。

「雨が止んだら、一度町に行こう。ツアイトの服も買わなきゃね」

俺のでもいいんだけど少し大きいみたいだから、と苦笑するレガートに、確かに、と笑い返した。

レガートは16歳ぐらいで既に大人びているとはいえ、まだまだ伸び盛り。ぱつと見すらしとしているが、狩りをしていたり、剣をやっていたりしているので意外に逞しい。

一方、俺はというと、多分16か17歳ぐらいだとは思うんだが、レガートよりも現時点で少し小さい。大人に舐められるかそうでないか、ギリギリのラインだろう。不老長寿であるならばもうこれ以上成長しないだろうから、レガートからだばついた貰うよりも、自分の物を買ってしまったほうがよさそうだ。

「やつぱり近くに町が在るんだ？」

「うん、アムっていう町だよ。大きな町に比べたら小さな町だけれど、欲しいものは大抵手に入るんだ」

お金は今日狩った動物の毛皮等売ったりするらしい。そろそろ冬になるので、高く売れるだろうとレガートが嬉しそうに話した。まだ見ぬ異世界の町を楽しむにしつつ、土砂降りの雨が止んだのは、それから3日後の事だった。

息を呑む美しさ、というのはこういう風景を言つのだろうか。

視界を遮っていた雨はさっぱりと上がり、空は冬の訪れを感じさせる冴えた色で、澄んだ空気が遠くの山までその美しい姿を魅せていた。

霊峰。そんな言葉が浮かぶ。

白く雪化粧している高い山々が見え、日の光に淡く輝いている。ひんやりとした透明な空気を吸い込むと、一層その透明感に引き込まれそうだった。

「直ぐにこの辺りも、真っ白になるよ。この辺りはあの雨があるから、木々は早めに葉を仕舞ってしまうんだ。特に雨が酷い森の辺りは、ああしてひよる長く木を伸ばしてるんだよ。夏には元気に葉を広げるから、今の時期見ちゃうとやっぱり寂しく感じるね」

その風景に見蕩れる俺に、朝食は外で取ろうと言ってくれたレガートが森や山々を指差しながら、1つ1つ丁寧に教えてくれて、ますますこの風景に引き込まれていった。

「綺麗な所だな」

「うん…とても」

感歎のため息と共に言葉を零すと、レガートも嬉しそうに微笑んだ。

「朝ごはん食べ終わったら、早速町に下りよう。下りるだけで一日仕事になると思うから、町に2泊ぐらいしていくよ」

「うん？それじゃあ2泊3日の小旅行？」

「うん、そういうこと」

作り方を教えて貰い作ったばかりの出来立てほやほやパンを頬張りながら小首を傾げると、レガートがくすくすと笑いながら頷いた。その瞳には、楽しみ？という問いかけが見てとれて、俺はパンを味わって飲み込みながら頷いた。

「うん、実に楽しみだ」

0004：町に下りてきました。

ああ、いいなあ。

息を切らしてアムの町に辿り着いてまず思ったのは、そんな思いだった。

しっかりと敷かれた石畳に、立てられた建物はやや高めに作られていて、ほとんど石造り。

あの滝のような雨季が終わり、直ぐに冬に入るので、その前にはーっと騒いでおこうと小さな祭りが行われていた。

花が飾られ、市が開かれ、音楽と笑い声が響く。けして大きな町ではないけれど、とても明るく、賑やかな町だった。

「ツアイト？」

立ち止まり、嬉しげに町を眺める俺に、レガートが不思議そうに小首を傾げた。それに俺は何でもない、と首を振って、ずっしりと重い荷物を持ち直し、レガートに遅れないように後についていった。

アムの町に辿り着いて、まず先に向かったのは毛皮を売れる店だ。長く慣れない山道を下ってきたので、息は切れるし汗だくだし、休む？というレガートの言葉に正直一休みしたかったが、何よりもまずこの荷物をどうにかしてしまいたかった。

いや、ほんと、毛皮って重い。

紙も重なると思うが、毛皮であれば余計だ。

どうやらレガートは最近アムの町に下りておらず、何時もよりも毛皮を溜めてしまっていたらしい。そのため俺もレガートよりは少ないがそこそこの量を持つことになり、結果、見事にへたばった。

しかし大丈夫だ、と荷物持ちを受けてしまった以上、今更弱音は吐けまい。

なんとか気合で店まで辿り着き、カウンターに置いた瞬間、その場に見事にへたり込んだ。うん、鍛えよう。一応男の身なのだ、それなりのプライドは確保していきたい。

そんな俺の様子に、くすくすと笑ってみせるレガートと一緒に笑い声を上げたのは、ヒゲもじゃに赤ら鼻を持つ気のよさそうなおじいさん店主だ。

「はっはっは！細っこいのによく頑張ったなあ、ボウズ！レガートも久しぶりじゃのう」

カウンターの前まで出てきて、労うように俺の頭をぼんぽんと優しく叩くおじいちゃんに、好感を抱く。見た目どおり、気のよいおじいさんだ。

「はい、お久しぶりです。今日は何時よりも少し多いんですが、会計して貰えますか？」

「おう！この時期、毛皮は入用じゃからなあ。今は他に客もおらんし、直ぐにでも計算しよう」

柔らかな笑顔を浮かべて会釈するレガートに、おじいさんは朗らかに頷いて見せながら、丸椅子を2つ持ってきてカウンターの前に

置いた。その椅子を進めてくるおじいさんにお礼を言って、俺はその椅子に座って、カウンターに向かって突っ伏した。

うん、暫く俺、駄目だわ。

そんな俺にレガートはくすくすと苦笑して、お疲れさま、と俺の肩を叩いた。何時かレガートのように体力をつけるぞ、うん。

「その子あ、友達かい？ここいらじゃ見ない顔だのう」

「はい。どうやら随分遠くから魔法の暴走で飛ばされてしまったみたいで、帰ることもできなくて。それで俺の家に置くことにしたんです」

「ほおお。それは大変じゃったなあ」

きょん、と驚きの表情を浮かべてこちらを見るおじいさんに、俺は苦笑して見せた。

今レガートが言った内容が、表向きの俺の事情だ。

『落ちた異世界人』というのはレガートが説明してくれた通り、とても特殊な人間だ。一般人の多くは『落ちた異世界人』の事を知らないことが多く、また知るものには研究対象や、”英雄”として見られることも多いという。

実際に『落ちた異世界人』により、国を救われた、という話しは何処かの国の歴史にもあるらしく、その潜在能力の高さから狙われることも多いようだ。

よって、レガートから提案されたのが、先ほどの表向きの事情だ。魔法の暴走は稀ではあるが、実際にそういう事が起きることがあるので、疑われにくいだろうという事だ。

実際、こうしておじいさんは驚いてはいるものの、疑っては居ないようだ。暫くこの言い訳は使えるな、と思いつつ、自己紹介をする。

「この間からレガートにお世話になっている、ツァイトです。ど

うぞよろしく」

「僕は革細工師のポルトという。よろしくなあ」

笑顔を浮かべて挨拶をすると、ポルトもにっこりと暖かな笑顔を返してくれた。うん、いいおじいさんだ。

「レガートもよかったのう。お前さんは山に直ぐに戻らにやならんし、それで中々友達ができなかつたろう？毎日楽しいかい？」

「はい、ツアイトが居てくれるおかげで、楽しいです」

「そうかそうか。しかし、今年の冬も山で過ごすのかの？ツアイトくんが居るなら心配は無いが」

その少し心配そうなポルトの言葉に、レガートは少し沈黙した後、ゆっくりと頷いた。

「はい…今年は、あの家で」

頷くレガートに、ポルトは心配そうな表情のまま、ゆっくりと頷き返した。

「そうか…。ではツアイトくん、レガートを頼んだぞ」

「はい。でも俺の場合、俺が沢山レガートの世話になりそうだけれど」

二人の雰囲気気がつかないふりをして、困ったように笑って見せると、レガートがくすくすと笑った。

「そうだね、まだまだ覚えること沢山あるからね」

「はっはっは！仲が良いようで結構じゃな！」

悪戯っぽく笑ってみせるレガートと、そんな様子の俺とレガートに、豪快に笑ってみせるおじいさんに、俺も笑顔を零す。うん、こちの雰囲気の方がいい。

それから本格的に計算に入ったポルトを眺めながら、これからレガートと何処を回るか相談した。

「まずは宿屋の確保か？」

「そうだね。直ぐに暗くなるだろうし、今は祭りもしているから、先に部屋を取った方が安心かな」

「次に服と、保存食？」

「保存食は最終日に買おう。その方が長持ちするし、荷物にならないからね。服は明日でいいかな。とりあえずは、お祭りを楽しもう」

「よし分かった。存分に楽しむ！」

「ふふ。このお祭りの期間だけ出される、美味しい料理もあるんだよ」

そんな会話をしていると、ポルトから計算が終わったと声かけられた。

「ほっほ、賑やかじゃのう。今回も良いもの揃いじゃったな、レガート。しめて45万ルーチェじゃ」

「45万…！？」

「ありがとうございます」

驚く俺を気にした風も無く、レガートはポルトの提示した額にすんなりと笑顔で頷いた。そして慣れた様子でテキパキと手続きがされ、レガートに連れられてポルトの朗らかな笑顔に見送られるまで俺の思考は止まったままだった。

「大丈夫？ツアイト」

「いや大丈夫は大丈夫だけど、いや、45!？」

「あれ？ツアイトの居た所では、毛皮は安く取引されてたのかな」

そう尋ねられて、確かに、良い毛皮は高値で取引されている事を思い出した。この世界には魔法はあるが、化学繊維は無いために、服だって地球ほどには安くは無いはずだ。ならば毛皮が高く取引されるのも、頷ける。

いやでも16歳で45万稼ぐって。お兄さんはちよつとレガートくんがいくら貯金しているのか気になったり。寧ろ何に使ってるのかが気になったり。やっぱり本とかなのだろうか。この世界の様々なもの、例えば紙とか書籍とかがどうなっているのか気になってきた。本は高いものなんだろうか、安いものなんだろうか？

悶々と考え始める俺にレガートは苦笑して、俺の手を取った。

「こういう事は、考えるより動け、だよ。もう暗くなってきたし、急いで部屋を取って、祭りに行こう。夜になると、いっそう賑やかになるよ」

楽しげに笑うレガートに、つられるように笑って、俺はあれこれ考えるのをやめた。

「そうだな。とりあえずは、楽しもう」

0005：お祭りに出かけてみましょう。

こじんまりとした、だけれど暖かな雰囲気を感じさせる、レガートお気に入りの宿で部屋を取った俺とレガートは、早速町で行われている祭りに遊びに行く事になった。

アムの町で行われるこの祭りは、青天祭と呼ばれるらしい。

滝のような豪雨の雨季が去れば必ず空は、その美しい冴えた青を魅せるからなのだという。

青天祭は雨が上がってから5日間続き、その間他の町から祭りの客を狙った商人も訪れるので、珍しい物も手に入るかも、とレガートが嬉しそうに話した。

「雨季の間にしか取れないものは多いんだ。加工すれば長持ちするものも多いけれど、大抵は直ぐに駄目になってしまうから、青天祭が終わるまでに料理に使ってしまうんだよ」

「なるほどな。それで祭りでしか出されない料理があるのか」

「その通り。精霊の加護を受けたアオミズタケを使ったシチューとか、青口ツコの実を砕いて混ぜたパンとか、とても美味しいんだよ」

「ふむふむ、なるほど？つまりこの2日間のノルマは、祭り料理を制覇する事にあるな？」

「でもかなり沢山の料理があるんだよ？ツアイト」

「そこは気合だ。レガートくん」

「お腹壊さないぐらいにお願いします」

きりつとした表情で決意表明をする俺に、レガートが可笑しくてたまらない、と言った様子でくすくすと笑うので、それにつられて俺も笑顔になった。

レガートと祭りを回りながら、食べ物を買ってその美味さ感激してみたり、シュルツセルのほとんどの場所で使われてる世界共通通貨であるルーチェ硬貨の使い方を教えてもらったり、見たことの無い物を見つけてはレガートに説明して貰ったりしていると、時々感じるのが若い女の子たちの視線だ。

うん、分かる。分かるぞその気持ち。

露天に出された商品を見ているレガートの横顔を見る。

盛大に灯された祭りの明かりをキラキラとはじく、淡く甘い金の髪。山で暮らしているためにあまり切る機会が無いのか、髪は背中ほどまで伸ばされていて、特に手入れをしていないというその髪は何時見てもさらさらとしている。

瞳は深く鮮やかな青で、その色合いは見るものを容易く惹き付ける。

整った顔立ちはどちらかというと穏やかな表情も合わさって女性的に見えるが、それは年齢と共に美しい男性へと成長を遂げるだろう。

性格も粗野ではなく、穏やかで丁寧な物腰は大抵の女性に好まれるに違いない。博識であるし、腕もたつ。料理も上手いし、荒れているような所も無い。山の中でひっそりと暮らしているのがもったいないぐらいの美少年だ。

そこでふと疑問に思う。これだけの美少年を、女の子が放っておくとは思えない。今は俺が居るから近寄ってこないんだと思うんだが、町に下りるたび声をかけられたりはしなかったのだろうか。

そう思つて、彼女とかは居ないのか、と尋ねかけると、レガートは困つたように苦笑した。

「居ないよ。ずっと祖父と2人で山の中だったから、女の子はどうしても苦手で」

それにちよつと勢いよく迫ってくるのが少し怖くて、と話すレガートに同情を禁じえない。憧れの美少年にいざ声をかけんと一生懸命な彼女たちの勇気が、レガートには恐怖になつてしまつているというのが本当に報われない。いや、確かにああいう時の女性はやらエネルギーだから、ちよつと怖いのは分かるんだけども。

願わくばレガートに可愛いお嫁さんが出来ますように、と何処かにいるかもしれない神様に心の中で祈りつつ、移動しようというレガートに同意して、ゆつくりと祭りの中を歩き出した。

「その…俺は聞いてもいいのかな」

「うん？何がだ？」

「こちらに来る、前の事」

やはり、気を使つていてくれたらしい。そのレガートの優しさが嬉しくて、微笑みを浮かべながら彼に頷いて見せた。

「いいよ。何が聞きたい？」

「うーん…それじゃあ、彼女はいたのか、とか」

レガートに問いかけを返されて、思わず苦笑する。

レガートには以前は女性だったことは話していない。なのでもしも出来ていたなら”彼氏”になるのだが、そのまま訂正しないことにした。

以前は女性だったなんて知ったらレガートの態度が変わつてしま

いそうだし、何より、男性の体である今の自分にともしっくり来ているのだ。女性だった時に感じていた煩わしさやもどかしさが無い。それがとても気楽で、気持ち良かった。

「居ないよ。恋愛というものをしてみた事もあったけれど、直ぐにやめたくなつてさ。だから多分、元から向いてないんだと思う。恋愛とか、さ」

恋愛をしているよりも双子を構っている方が楽しかったし、恋愛をしているよりも物語を読んだり、友達と遊んでる方が楽しかったし、心が安らいだものだった。

「ま、もしかしたら情熱的な恋に一瞬で落ちることもあるかもしれないし、その時になるまではいいかなって思ってるよ」

そういつてレガートに笑って見せると、何処か納得した様子で頷いた。

「そつか…何かツアイトらしいね」

「ふふん、だろ？」

「うん」

それから兄と双子の妹と弟が居た、だとか、どんな家族だったか、といった話をしていると、お祭りでお決まりのようなイベントが目の前で発生した。

「ごろつき vs ごろつき、である。」

人相のあまりよろしくない大柄の男たちが、町の広場で騒ぎを起こしていた。酒を片手に、6人ぐらいの男たちが、同数ほどの男た

ちと大声で騒ぎ、喧嘩をしていたのだ。そろそろ拳、いや、腰に差している武器が出そうな雰囲気だ。その険悪な空気に、広場で祭りを楽しんでいた罪なき客が、恐る恐るといった様子で彼らの様子を窺っていた。

「酒が入ると喧嘩が起きやすくなるのは何処の世界も一緒か。一応聞くけど、ああいうのってこの町じゃよくあることなのか？」

「ううん、この町は皆穏やかな人ばかりだし…多分、冒険者が流れてきた傭兵じゃないかな」

見ればレガートの表情もやや険しい。何時も穏やかな分、レガートは怒ったら怖そうだ。

騒ぎの中心に目を戻すと、険悪な雰囲気は一層膨れ上がったようで、男の一人が剣を抜いた。

そこで、あ、と思った時には、体が動いていた。

この町の広場は、それほど広くない。何かの女神像が置かれ、その前に扇状に噴水があり、その周りに舞台のように扇状に広場のスペースが広がっている。

よって、剣や斧といった武器を振り回そうと思ったなら広場の3分の1ほど取らなければ自由に立ち回ることが出来ない。

だから騒ぎを起こしている男たちが武器を振り回せば、様子を窺っている無関係の客にまで、被害が及ぶのだ。

間一髪。

周りを気にせず取り出し、大きく振るった男の斧が、女の子に当たりかけたのを後から抱き寄せることでなんとか助けることができた。

目の前を斧がかすり、自分の髪が数本切られてひらひらと中を舞うのを硬直した様子で見送る女の子に、声をかける。

「大丈夫？危ないから離れてるといいよ。後、突然抱き寄せたりしてごめんね」

「えっ、あ、はい！あ、ありがとうございます…」

女の子をゆつくりと放し、こちらを気にもしていない男たちを見る。彼らはまだ怒鳴りあっている。うん、実につるさい。

「ツアイト！」

「あ、レガート。はい、この子頼んだ」

へたり込みそうな彼女を慌てた様子で追ってきたレガートに、はい、と渡して、俺は近くのテーブルにスタスタと歩いていった。

そして手に取るのは、殻の皿。持てば平たくともずっしりと重みがあり、その重たさに満足して、その皿を、剣を振りかぶって相手を切りつけようとしていた男の顔に投げた。

「うん、素晴らしい。クリティカルヒット？」

鈍い音と共に広場の石畳に倒れ付いた男を見て、自分の腕にとても満足。がしゃんと何か割れる音も聞こえたけれど気にしない。どうせ彼らが弁償する事になるのだから。

残念な人相の男たちの視線が一斉にこちらを向くのを感じて、にっ、と笑って見せた。

「成敗！」

0006：喧嘩、ときどき、お買い物。

例えばアクション性の高いゲームをやったとしよう。アニメでもいいかもしれない。それらを見てから、目を閉じて、自分もあんな風な動きをしたい、と想像するでしょう。

でも普通なら、想像するだけで、その動きを実現したりは出来ないものだ。体のつくりがまず違うし、鍛えても居ない。練習などをしなければ、想像を現実にしたりは出来ないものだ。

でもその想像を実現できるとするならばきっとこんな感じだろうなあ、と、金属で出来たディナーナイフで男が振るった短剣を受け流し、流れるような動作でその男の顔に裏拳を叩き込みながら思った。

はい、タダイマ喧嘩の最中です。きつと地球の我が兄が見たら、代われ！と叫びながら乱入してくるであろう、そんな状況です。

ふと腰を落とすと、頭上を鋭い突きが通過していき、俺を狙っていたひよる長い男の顔面に強烈な打撃が叩き込まれた。

乱入したのはこの世界に居ない兄ではなく、何時もより陰しい、というか怖い表情のレガートだ。鍛えているだけあって、彼の一撃で男は容易く地に沈んだ。

流石だなあと感心しつつ、そのまま体を後へ倒し、逆立ちする要領で強く両足を空に突き出すと、レガートと俺を狙っていた斧男の顎にクリティカルヒットした。

いや、この体、本当に凄いよ。

イメージしたとおりには体が動く。流れるように動くものだから、体を動かしているのが物凄く楽しい。

それにもっと凄いのは、感覚の良さだ。今あそこの男はこう動くうとしている、左斜め後ろには斧を持った男がいて、もう直ぐ男側の間合いに入る、そんな事が気配で感じ取れる。

そうなれば後はどうすれば相手を倒せるかだ。

いくら体が思い通りに軽やかに動くといっても、レガートのように鍛えていないから一撃は軽いし、ずっしりと重い大きな男の足を払って倒すことは出来ない。

であれば、物を使うしかない。

使うものは使いやすければ何でもいい。皿とか瓶とかコップとか、ナイフやフォークでもいい。下手に触ったことの無い、男達が持っている剣を奪っても使いこなすことなんて出来ないだろうから、とにかくそこら辺にあるものを活用するわけだ。投げ方や使い方次第で、どんなものでも武器になりえる。いや、時と場合にもよるけれどな。

「くそっ！てめえら何なんだ！」

顔を真っ赤にしたやや細身の男がこちらを見て叫ぶ。

こらこら、いけないぞ。そんな隙を作っちゃ、叩いてくださいといわんばかりじゃないか。

叫んだ男の顔を蹴り倒し、石畳と熱烈なキスを強制的にさせた後、俺はざっと辺りを見回し、傍のテーブルに奇跡的に残っていた酒瓶を手にとって、観客と化していた祭りの客たちに高く掲げて見せた。

「勝った!!」

「おおおおおお!!」

息を吞んで場を見守っていた観客たちから、一斉に歓声が沸き起こる。

やるねえ、だとか、いいもの見せて貰った!などという嬉しありがたい歓声を頂きながら、体を思うとおり存分に動かした気持ちよさとやり遂げた達成感で、満足な気分では観客に手を振っていると、ぐい、と力強く肩を捕まれた。

「ツアイト。ちょっとあっちに行こうか」

「……はい」

やけにキラキラとした笑顔を浮かべるレガートがとても怖かった。それから宿に戻って、寝る時間まで説教されました。レガート、怒ると怖い。

翌日。何時もよりも遅めの朝食を取った俺とレガートは、まったりした午前の空気を堪能しながら、町へと出た。

祭とはいえ、祭りの雰囲気盛り上がるのは夕方近くからなようで、夕方までは服や雑貨などを見に行くことになった。

「服の他に、欲しい物はある?」

「居候の身だし…特には。強いて言うなら、手帳が欲しいな。いろいろ知った事、纏めておきたいんだ」

そう言つと、気にしなくていいんだよ、とレガートは微笑んだ。いやでも、ただでさえ色々して貰っているのだから、なるべく俺に関する出費は抑えていきたい。早く色々覚えたり鍛えたりして、レ

ガートの手伝いが出来るようにならないとなあ。

服屋でこれから備えた冬服と、防寒衣、後は色々な機会に使えるような服をいくつかレガートに買ってもらった。やたら服屋のおばちゃんが必要な服を俺とレガートに着せようとしたんだけど、いや、気持ちとは分かるけれど！丁重にお断りしておいた。美形もある意味大変だ。

雑貨屋ではこげ茶色の革のカバーがついている、ちょっと大きめの手帳を買って貰った。レガート曰く、地域にもよるけれど、紙は魔法で製造する事が多いので、あまり良いものを求めないのであればそこまで高い物ではないんだそうだ。それから手帳にあわせた筆箱と、レガートも欲しいとのことで10本ぐらい入った鉛筆のセツトを買った。

他の店で大小の瓶などを買い求め、山のほうでは手に入りづらい薬草なども一緒に買い求めた。

そうなると流石に荷物が多くなってきたので、俺の革靴も買い求めることになった。

うん、やっぱり革靴はちょっと高かった。なので安く、丈夫な物を買って求めた。狩りをしていていい革を良く見ているレガートはちょっと渋顔だったけれど、使えればいいんだこういうのは！

荷物を鞆の中にまとめ、一度宿に戻ろうとなった時、他の町から来た商人が集い開いている市を覗いて行く事になった。

そう、この市。この市が最高に面白い。

本を出しているもの、何かの薬草を売り出しているもの、アクセサリーから服、武器など様々なものが広げられていて、右を見ても左を見てもまったく飽きてこない。

「レガート、あれは？」

「魔道書の専門店だね。」本によつては魔法がかかっているものもあるので、興味があるものは一度店主に声をかけて下さい”って看板に書かれてる」

「ああ、いかにもファンタジー…！じゃああれは？」

「錬金術素材の専門店かな。中々手に入りにくい素材や鉱石を売ってるんだよ」

「錬金術もあるのか、この世界！じゃああつちは？」

「”精霊の加護、おつけします”。あの店主さんは精霊使いなんだね。持つてる腕輪とか指輪とかに精霊の加護をつけたり、または加護をつけたアクセサリを売っているお店だよ」

そんな風にレガートに一つ一つ教えて貰いながら、俺は深く頷いた。

「なるほどな。…俺、何日でも此処にいられそうだ」

「ふふ、みたいだね。此処に出されてるものは皆少し高いものばかりだから、あまり買ってあげられないけれど、1つくらいだったら何か買ってあげるよ」

しみじみと感激している俺に、レガートは面白そうに笑って、そんな悪魔の囁きをしてきた。

いや、でも、その、高いんだろう？

ちらりとためしに近くの店の商品の名札を見れば、普通に5桁の値段が書かれている。

うん、無理だ。やめておこう。

既に沢山使わせてしまっているのだから、やはり此処で買ってもらうのは駄目だ。明日は食料を沢山買って帰るのだし。

欲しい。欲しいけれど！我慢だ、俺。

「……今回は、やめておくよ」

ちよつと未練が出てゐる台詞だが、やはり此処は自分で稼げるようになつてからだ。

そんな俺を見て、レガートが分かったよ、とちよつぴり楽しそうに頷いた。

0007：冬がきました。

冬が来た。

レガートの言っていた通り、アムの町から戻って直ぐに雪が降り始め、今では見渡す限り一面の銀世界が広がっていた。

地球に居たころ、住んでいたところでは中々雪など降らなかったから、寒さで澄み切った青い空を見上げながら、暖かなロツコを飲んみつ雪景色を眺めるのが、毎日のちょっとした息抜きになっていた。

レガートはというと、明け方よりも少し暖くなる昼過ぎに狩りに出ることが多くなった。この時期出歩く動物は一気に減るが、この時期にしか見かけられない動物も多いんだそうだ。

その間俺は何しているかというと、さっき言ったようにのんびり雪景色を眺めたり、家の家事をしたり、レガートに作ってもらったこの世界の文字表を見ながら文字の練習を試みたりしている。あ、そうそう。剣は少し振るえるようになった。今はまだ体作りの最中だから、戦える程度に振り回せるようになるのは、まだ当分先になりそうだ。

この世界の事については、レガートの教え方が上手いおかげで、そこそこ分かるようになってきた。

レガートの家がある此処は、ソヴァールという国の隅っこに位置

しているらしい。

白き美しき国、ソヴァール。遙か遠い昔、多くの国々が入り乱れて戦争していた時代に、戦いに疲れたもの、裏切られたもの、逃げる終えなかった者達などが集まり、協力し合う集団が出来た。

焦げる黒も、錆びた赤もいらぬ、青ざめた四肢など見たくも無く、欲に塗れ掲げられた金などいらぬ。

欲しいのは一面に広がる、美しい白の花畑。

その思いを胸に、多くの精霊から加護を得た勇気ある若者を主に、疲れた者達が再び立ち上がることを選んだ。それが、ソヴァールの始まりだという。

以来国花ともなっているその白い花は、一面の白銀がゆるやかに解け、その白を柔らかな花に譲り渡すように、緑芽吹く春に国中に咲き乱れるらしい。その花には多くの精霊の加護がかけられており、春の間は、外部からの魔法干渉などに対して、鉄壁の守りを得るという。

そのおかげなのか、ソヴァールは精霊使いが多く生まれ、精霊魔法や、精霊から力を借りる精霊陣という魔法技術が発達している国なのだという。この辺りの国では、一番なんじゃないかな、とレガートが話していた。

現在、ソヴァールとその周囲の国々の友好関係は安定しているらしく、ここ数百年は戦争になっていないのだという。貿易も盛んであるし、冒険者達も多く訪れているという。

そう、冒険者。レガートからちらほら聞いていて気になったから、その冒険者というものが何なのか尋ねてみた。

冒険者という存在が出始めたのは、実はつい60年ほど前の事らしい。

ソヴァールよりも遙か南にある大国、ウェントウスという国に居

た名の知れた冒険家が、ある日冒険者ギルドを立ち上げた。

世界にはこんなにも腕の立つ者達が居て、その胸に熱い情熱を秘めているのだから、冒険しないなんてもったいない、と。

とはいえ実際には、ノートリアス討伐を主としていた傭兵達をかき集め、彼らをきちんと教育することで、粗野で乱暴物だったイメージを一転、英雄に仕立て上げたのだ。

それを面白がった吟遊詩人たちが冒険譚を歌い、それを聞いた国の貴族達が面白がって支援するようになっていき、それらを聞いた日頃腕は立つものの兵士として志願するのはなんかちよつと違う、と思っていた実力者達の心を動かした。

結果、冒険に憧れていた若者たちの心に火をつけ、冒険者という職業は一気に世界に広がっていくことになった。

これに何より驚いたのは、ウエントウスの国王だっただろう。ちよつと物珍しいギルドが出来たようだ、と聞いていたら、あつという間に大人気ギルドへと変貌を遂げたのだから。

しかしウエントウスの国王は、頭の良い人物だった。無闇にその勢いを止めようとするのではなく、寧ろ国家公認のギルドにしてしまったのだ。

その事によりウエントウス国王の支持率は上がり、国家の公認を受けた冒険者ギルドはその成長をさらに加速させた。

国の優秀な人材の手を借りて他国と国を交えた契約を交わし、多くの国々に冒険者ギルドの支部を設置してゆき、現在では30もの国々が冒険者ギルドの設置を受け入れているまでになった。

たった60年でそこまでの成長を遂げさせた、冒険者ギルドの設立者であるアーガス・オルキデアの手腕、恐るべしである。

だがもしも冒険者ギルド加盟国同士の仲が悪くなった場合、冒険者ギルドはどうするのだろうか、という疑問に、レガートは冒険者ギ

ルドの規則を教えてくれた。

「といっても俺も詳しいわけじゃ無いんだけどね。確か冒険者ギルドでは、国からの依頼を受けることもあるけれど、国同士の争いに関わるような内容のものはけして受けない事にしていたはずだよ」

冒険者ギルド同士は、ギルド員同士が国と国の争いに巻き込まれて剣を交えることの無いように小まめに魔法で連絡を取り合っているらしい、とレガートは話した。

またギルドの支部がある国で戦争が起きた場合、ギルド員を撤退させて戦争に巻き込まれないようにもするんだそうだ。

もしも国の兵士に志願する場合には、ギルド員の証であるギルドカードを返却する事にもなっていて、徹底的に冒険者ギルドというものが国に深く関わらないように出来ているらしい。

流石60年で此処まで成長したギルドだ。よく考えられている。

（そうだ、レガート）

冒険者ギルドの説明を聞いて、納得して頷く俺を見て、レガートは微笑みながらも何処か迷う様子を見せていたのを思い出す。

レガートはきつところ、俺に聞きたかったのだろう。

冒険者になるのか、と。

もしその問いかけをされていたら、俺は頷いていた。

ずっとこのままレガートと暮らしていく事はしないだろうし、折角の異世界だ。色々世界を巡ってみたい。

そのための剣術であり、そのための文字の練習だ。

そしてレガートも、俺がそう答えるのをうすうす分かっているの

だろう。

だからきつと、迷っているのは、自分の事だ。

レガートの祖父が亡くなってから、もう3ヶ月だ。

この世界では1ヶ月は21日間固定で、1年は21ヶ月、1年はしめて441日間になる。

1ヶ月を大体31日間で暮らしていた俺にとって、この世界の1ヶ月はやや短く感じるが、レガートにとってはどうなのだろう。

やっぱり、長年祖父と暮らしたこの家を、まだ離れがたいのではないだろうか。

だけれどずっと此处で暮らしていくわけにも行かない。多分、レガートはそう感じているのかもしれない。

少し温くなってきたロツコを飲み干しながら、雪原に見え始めた金の髪を見て、俺はレガートのために暖かなロツコを入れる事にした。

0008：春になりました。

雪がやみ、雪原が解けてソヴールの白き花が咲く、春。

冬にはあれだけ寂しかったのに、日に日に緑豊かな賑やかな森へと姿を変えていた。

初めてアムの村に下りたあの頃から、3ヶ月が経っていた。

白銀に囲まれた雪の3ヶ月間は、本当に穏やかな毎日だった。

家事をして、文字の勉強をして、レガートに剣や狩りを教えてもらい、2人でのんびりと過ごす。

そうそう、真面目に勉強したおかげで本だって読めるようになった。若干、書くのには不安があるが、自分の名前や簡単なメモぐらいは書けるようになった。これなら何処へ行っても大丈夫だろう、というレガート先生のお墨付きだ。

剣もそこそこ扱えるようになったが、レガート曰く、ちゃんとした俺用の剣を買ったほうがいいという。

レガートが扱っている剣は、鋭さで斬るというよりも、力と剣の重さで叩き斬るパワータイプのもので、長剣といったものが主流になる。ロングソードやバスタードソードといった剣だ。

しかし俺の体は、力で押し切るような作りはしていないらしい。どちらかというとスピードと的確なテクニックを駆使する、クリティカルヒット狙いの剣術になるようで、シミターやレイピアといった細身で鋭い剣を使う事になりそうだ。

そういうわけで、剣を求めないといけないし、冬の間に溜まった毛皮も売らないといけないとのことで、そろそろ一度アムの町へ下りてみるという事になった。

で。

なんだろうこれは。

アムの町に下りるなり、俺とレガートは10人ほどの女の子達に囲まれたのである。

「あ、あの！イチゴのジャムは好きですか？私の家で今作っていて…」

「今日のお召し物、素敵ですね！とても似合っていると思います！」

「ツアイトさん、って言うんですわよね？素敵なお名前だと思いますわ…あ、私の名前は…」

うん、見事に黄色いな。声が。いや、彼女たちが放っている雰囲気はピンクだけれども。こう、可愛い感じの。いや、熱い感じの？

俺にとっては、ああ可愛いなあ、ちょっと耳が痛いけれど、なんて思っただけだが、レガートはそうはいかない。

ちらりとレガートを見れば、若干青い顔で、苦笑を浮かべている。これを機会に女性を克服、なんてのもいいのだが、今レガートに倒れると大変なことになる。レガートは冬の間で少し背が伸びたし、彼＋大量の毛皮を店まで運ぶ、なんて力技は俺に出来ない。

仕方ない、お嬢さん方には申し訳ないが、今回は遠慮して貰おう。レガートの手を取りながら彼女たちの間をすりすりとすり抜けて、彼女たちにつこりと微笑みかける。

「ごめんね、今は荷物があるから。また今度」

美形の笑顔は偉大だ。

頬を染めて固まる彼女たちについてとばかりに軽く手を振って、レガートと一緒に女の子戦線を突破する。

そしてようやく彼女たちが見えなくなってきた所でレガートの手を離すと、やや疲れた様子のレガートが、小さく感謝の言葉と共にこんな言葉を口にした。

「ツアイトは女の子慣れしてるんだね…」

いや待て。何かその言い方は誤解を招きそうだ。

革細工職人のポルトおじいさんに、女の子たちに囲まれたことを話すと、ポルトおじいさんは以前と代わらぬ暖かな笑顔で、豪快な笑い声を上げた。

「はっはっは！お前たちはこの前の青天祭から、ちょっとした有名な人になっておるからのう」

「有名人？」

「ほれ、暴れようとしてた流れ者がおったじゃろう？それをあつというまに叩き伏せた若い2人組み、とな」

お前たちは顔も良いから女の子らに大人気じゃよ、と朗らかに笑うポルトさんに、なるほどなー、と笑って返していたら、がつつりと肩を捕まれた。勿論、掴んで来たのはレガートだ。

「ツアイト…お仕置きは何がいいかな」

ごめんなさい。謝るからそのキラキラ笑顔やめてください。怖い
ですレガートさん。

レガートはどうやら目立つのが苦手なようだ。

「ほっほ！仲が良いことじゃの。しかしレガート、腕を上げたの
う」

お仕置き軽減の交渉などをしたりしてじゃれる俺とレガートを見て、
ポルトさんが笑顔になりつつ、感心したように頷いた。

「希少種3体、見事に仕留めておる。そうさの、しめて73万か
の」

「……73万…！？」

「ありがとうございます」

専門家であるポルトさんから褒められて嬉しそうなレガートを見
上げて思う。この若さで70万を一気に稼ぐ美少年。レガート、未
恐ろしい少年である。

色々頑張つてな、とポルトおじいさんの優しい笑顔に見送られ
ながら店を出ると、既に空は鮮やかな黄昏色にその身を染めていた。

「やっぱり山下るだけでも1日仕事だな」

「真っ直ぐに下ることが出来ればそうでもないと思うんだけど、
あの辺りは少し入り組んでいるから、どうしてもそうなっちゃ
うね。行きは荷物もあるし。今日は宿に泊まって、明日剣を見に行
こう」

「ああ、了解」

一体どんな剣があるんだろうなあ、と、ファンタジーでしか味
わえないであろうわくわく感を味わいつつ、祭りが行われていない

アムの町を見る。

穏やかだ。

祭りの時は多くの人で賑わい、多くの出店が出ていたが、今は何処かのんびりとした素朴な暖かさを感じる。魔法の暖かな明かりが徐々に灯され、仕事を終えた町の人々が食事へ出たり、酒場へと足を運んだりし始めるそんな時間。

賑やかな町の風景も楽しかったけれど、こういう風景も好ましい。ふ、と一息つける、そんな暖かさと懐かしさを感じる。

いいなあ、と思う。

まったりとした気分で町の風景を眺めていると、不意に腕を引っ張られた。何事かと見ると、レガートが少し困惑した様子でこちらを見ていた。

「レガート？」

「あ…いや…。宿に行こう」

自分で何故そんな事をしたのか分からない、といった表情のレガートにからかうことはせず、そうだな、と微笑んで頷いて見せた。

レガートお気に入りの宿へ辿り着き、部屋の空き具合を尋ねると、珍しくギリギリ2人部屋が1つだけ空いていると言われた。

宿屋の店主であるクレッツおじさん曰く、今日は冒険者達が多く泊まりにきてるのだという。

「祭りでもないのにアムの町に冒険者が来るなんて、珍しいで

すね」

「そう、そうなんだ。で、ちょっと話を聞いてみたら、どうやらちよつと大きな討伐クエストをやっているらしくてね。その討伐対象が居るのが、此処から近いらしいんだよ」

詳しく話を聞くと、こういうことらしい。

アムと街道が繋がる町、グロリュという町がある。グロリュはアムよりも大きな町で、そこには冒険者ギルドがあるという。

この辺りで唯一の冒険者ギルドであるグロリュではアム周辺のノートリアス退治の依頼も引き受けていて、アムの町の誰かがノートリアスを見つけ、それを警備兵に報告、そして国からの依頼として冒険者ギルドに話が回ってきたそうだ。

「だからレガートくん、暫く狩りに出るのはやめておいたほうがいいかもしれない。話ではレガートくんのいる山とは反対方向ならしいんだが、移動する事もあるからね」

「分かりました。そうしておきます」

心配そうなクレッツさんに、レガートも真剣な表情で頷くのを見ながら、俺は質問してみた。

「なあクレッツさん、そのノートリアスってどんなヤツなんだ？」

「え？ええと、確か植物系の大きな怪物だったかな。強い上に増えやすいやつだから、早めに倒さないといけない、って誰かが言っていたね」

「ほほー。それ言ってたのって、誰さん？」

「確か…ほら、あそこの眼帯してる赤髪の男の人だよ」

クレッツさんが指差した方向を見れば、宿の食堂で、熊のよう

な大きな体を持つ男と楽しそうに酒を手には談笑している男が居た。
その姿を確認した俺は、クレッツさんにお礼を言って、クレッツさんから貰っていた鍵をレガートに手渡した。

「ツアイト？」

「少し話聞いてくるよ。レガートは先に休んでて」

怪訝そうな表情をするレガートに、にっと笑ってみせて、俺はその男のいるテーブルへと足を向けた。

0009：シリウスとムート。

左目に眼帯をつけた赤髪の男は、シリウス・ヴィントと言った。

「こっちは相棒のムート。で、雪の妖精さんのお名前は？」

話を聞かせて欲しいと声をかけるなり、楽しげな笑顔を浮かべて自己紹介をし始めたシリウスに、俺は笑って答えた。

「雪の妖精だなんて、恐れ多いよ。俺はこの辺りで居候させて貰ってる、好奇心旺盛なただの少年。ツアイトだ」

手を出して握手を求めてみると、シリウスは一度酒の入ったジョッキを置いて、手を握ってくれた。

「なるほど？確かに触っても解けないようだ。まあ座れ。ちっとムートの顔が怖いかもしれねえけどな」

「そっか？俺はムートさん、かっこいいと思うけれどな」

相棒のムートを指して笑うシリウスに、俺はにっと笑顔を返しながら、勧められた席に遠慮なく座った。

確かにムートさんは体は熊のようにとても大きいし、スキンヘッドで尚且つ厳つい顔立ちをしているが、こちらを見て小さく微笑む姿を見れば、怖いというよりもカッコイイと感じる。外見が野獣、

中身が小動物なタイプには俺は弱い。ギャップというのは素晴らしい。

ムートに動じない俺をどう思ったのか、シリウスは面白そうに笑みを深めた。

遠目で見たときも思ったが、シリウスはなかなかのイケメンだ。浅黒い肌に、深みの在る鮮やかな赤髪、燃え上がりそうな美しい緑の瞳が実に目を惹き付ける。年齢は30かそこらだろうか。余裕の在る態度が、色々な面で経験豊富そうだと感じさせる。もしも美しい狼が人の姿を取ったなら、きっと彼のような姿になるだろう。

「で、何が聞きたいんだ？好奇心旺盛な少年」

「冒険者の事と、ノートリアスの事。クレッツさんから、シリウスさんがノートリアスについて話してたって聞いたからさ」

視線で宿の店主であるクレッツさんを指すと、シリウスはなるほど、といった様子で頷いた。

「冒険者に興味があるのか？」

「ある。実は直ぐにでもなりたかったり」

「正直だな、少年」

にっと笑って見せると、シリウスが楽しげに笑った。

その時、ずっと黙っていたムートがゆっくりと口を開いた。

「…憧れだけなら、やめておいたほうがいい」

その言葉にムートを見上げると、ムートは静かな瞳でこちらを見ている。

「憧れだけで、なれるものではない」

静かな、淡々とした言葉に含まれる、体験したものだけが語れる経験。

シリウスを見れば、微笑みながらも静かな瞳をこちらに向けていた。

なるほど、と思った。

何故シリウスがあっさりこちらの話を聞こうとしたのか。

それはきつと、この言葉を聞かせるためなのだろう。

人というのは不思議なことに、目の前で隠されたりすると、それを無理矢理でも暴きたくなる所がある。

だからこそ、シリウスとムートは憧れを抱き、冒険者に冒険譚を聞こうとする少年たちに声をかけられては、話をするように見せて、その実、警告を口にしてきたのではないだろうか。

うん、優しいなあ。彼らは優しい。

「確かに、冒険者になりたいと思うのは、ただの憧れなんだ。ずっと昔から、胸踊る物語を読んでから、ずつと。触ったことの無い剣をこの手に思い浮かべて、見たことの無い風景を思い浮かべて、した事の無い、怪物を倒したりする事を夢見てた。でもさ、始まりってそういうものじゃないかな。憧れとか、夢とか、わくわくするような想いとか、そういうものから始まる。——違うかな？」

ムートは、シリウスは、こちらに問いかけた。本気なのか、と。だから俺はそれに答える。本気だよ、と。

「楽しいだけじゃあ無いぜ？」

「それは、どんな暮らしをしていてもそうだろう？なら俺は夢を取るよ。叶える為に、シリウスやムートの話が聞きたい」

そう言って笑って見せると、シリウスとムートは視線を合わせた後、シリウスは仕方無さそうに俺の肩をぽんぽんと叩いた。

どうやら彼らのお眼鏡に適ったようだ。

「つてか、早速先輩を呼び捨てか？」

「あ」

まあいいけど、といいつつも、シリウスがにっこりと微笑みながら、むにーつとほっぺをつねってきた。つねってくるシリウスはとても楽しそうだ。あんまりに楽しそうなのでそのままつねらせていると、ムートがシリウスを止めた。やはりムートさんは優しい。

「さつてと、何から話すか。冒険者の事はどれぐらい知ってるんだ？」

「冒険者ギルドがどんな風に来たかを友達に聞いたぐらいかな。だからほとんど知らないんだ」

「なるほど。まあアムにやギルドは無いし、そんなもんか」

俺の言葉にシリウスは頷きながら、金色の鎖で首に下げていたものを取り出してテーブルの上に置いた。

金色の、小さなカードだった。縦5cm、横2.5cmほどの薄い金属のプレートで、右下に赤い長方形の透明な石がはめ込まれている。プレートには冒険者ギルドカードという文字と、星マークが4つ、刻まれていた。

それを見終えた頃を計って、シリウスがくるりとカードを裏返した。そこにはカードの持ち主であるシリウス・ヴィント、という名前が刻まれていた。

「これが冒険者ギルドカード、まあまんまだな。ギルドでメンバ

「登録するとこれを貰える。この透明な石の部分があるだろ？この石は魔石でな、持ち主の情報や受けたクエストの情報は皆ここに記録されてるんだ。ああ、クエストって言うのは冒険者が受ける依頼の事な」

「ふむふむ。でもこれ、もし無くしたらどうなるんだ？」

地球に居た頃の癖というか感覚の所為で、そんな細かいことが気になってしまい尋ねると、ムートがその疑問に答えてくれた。

「それは一定以上持ち主と離れると、使うことが出来なくなるようになってる。紛失した場合、やや手数料がかかるが再発行して貰うことが出来る」

「おお、流石ファンタジー……」

「ふぁんたじい？」

「あ、いや何でもない。メンバー登録ってどうすれば出来るんだ？やっぱり推薦状とか、きっちりした出身とか必要なのかな」

「いや、登録自体はちよつと金を出せば誰でも簡単にできる。それこそ、フライパン持った奥様とかもな。けれど一定期間クエストを受けなかったりするとカードは効力を失って、復帰試験を受けない限り使えなくなる」

「へえー……意外にしっかりしてるんだな、冒険者ギルドって」

シリウスにカードを触らせて貰い、感心しながらカードを指先でなぞる。とても堅くて滑らかな金属だ。でもあまりひんやりとはしておらず、何か不思議な感じがする。

「何万つていうギルド員が居るからな。冒険者ギルドはよく考えられてるギルドだって、ほんと思うぜ」

「なるほど。やっぱりクエストって、ノートリアス退治が多いのか？」

「ああ、基本的にはな。中には一般人にゃキツイような山の中な
んかにいって、希少な鉱石を取ってくるだとか、そういうのもある。
ま、自分の技量をよく考えて、無理の無いクエストを選ぶのが一番
だな」

そこまで話して、ふと、シリウスの表情が怪訝なものに変わった。

「そういえばツアイト、お前は何か出来るんだ？剣もさしてねえ
し、魔法でも使えるのか？」

「それは俺も思っていた。ソヴァールには精霊使いが多いが…」

ムートまで不思議そうな表情でこちらを見てくるので、ごまかし
笑顔を浮かべながら、ひらり、と軽く掌を上げた。

「一応、剣士希望？」

「オイ…？何で疑問系なんだ？」

まだ剣を友人から習っている途中で、明日自分の剣を買いに行く
予定だと正直に話すと、シリウスに頬をびよんと伸ばされた。痛い。

0010：冒険の師匠。

夜も深け始める頃、シリウスとムートと別れてレガートの居る部屋に行くと、レガートはまだ起きていた。

「レガート？まだ寝てなかったのか」

「ツアイト……。うん、少し考え事をね」

扉を閉めて、部屋に置かれた小さなテーブルの上に、クレッツさんから貰った合鍵を置いた。てっきりもうレガートは寝ているのかと思って、クレッツさんから合鍵を借りたのだ。

狩りをするレガートは、朝が早いために、夜も早く寝る。だから夜が深けるまで起きていることは珍しいのだ。

レガートは窓辺に椅子を持っていつて、ゆったりとした様子で外を眺めていた。何処か遠くを見るように、淡々とした表情を外へ向けていた。

俺はレガートに近づいて、彼に近いベッドに腰を下ろした。

レガートの見ている外を見る。今日は月が無い。地球の都会では滅多に見られないような星達が、薄いカーテンのように広がっていた。

「ツアイトは……旅に、出たいんだよね」

ぽつり、と零したレガートの言葉に、頷く。

「ああ。出るよ」

返した言葉に、レガートの瞳がこちらを向く。

「直ぐにでも…?」

「うん。できるなら、直ぐにでも」

静かなレガートの青の瞳を見て頷く。するとレガートの表情が、ふ、と崩れた。

「…そっか」

まるで肩の力が抜けたように、レガートが柔らかな笑顔を浮かべた。

翌朝。レガートと一緒に宿の食堂に行くと、待つてましたといわんばかりにシリウスとムートが俺を待ち構えていた。

「よお、ツアイト。意外に早起きだな」

「友達が早起きだからなって、今日は討伐クエストだろ? シリウス」

がっしりと逞しい腕に首をホールドされ、ギブギブとその腕を叩きながら見上げると、シリウスが楽しそうな笑顔を浮かべた。

「今日は今日でも、夕方からなんでも。討伐クエストまでの間、優しい先輩である俺とムートは可愛い後輩の武器選びに付き合っ

やろうかと思っただ。優しいだろ？」

「大変オヤサシイトオモイマス」

「そーかそーか。はははは」

「いたたたた」

そんなこんなでシリウスにじやれつかれていると、レガートが俺をシリウスから助け出してくれた。

「あまり俺の友人をいじめないであげてください」

ああ、助けてくれて嬉しいよレガート。だが、後から小さな子供を持ち上げるように助けるのはちょっと悲しい。最近また少し背伸びたよな、レガート。

レガートを見たシリウスは、少しきょとんとした後、まじまじとレガートの顔を見た。

「これはこれは…ああ、悪い悪い。君がツアイトの友達か。俺は冒険者のシリウス・ヴィント。こっちは相棒のムート。今言っただうに武器選びに同行しようと思う。いいか？」

レガートは俺を下ろし、シリウスとムートを見た後、静かに口を開いた。

「俺はレガート・クロツシェラと言います。来るのはいいですが…何故ですか？」

その素朴な疑問に、シリウスが楽しげな笑みを浮かべ、ムートが小さく苦笑した。

「こいつと話をすればするほど、心配になってな。ムートと話し

て、暫くこいつを鍛えることにした」

「え？本当に？シリウス」

「ああ。俺も厳しいがムートも厳しいぞー。覚悟しとけ？」

シリウスの言葉にもっとも驚いたのが俺だ。まさかそんな話になるとは思わなかった。ぐりぐりと楽しげに頭をなでてるシリウスと、優しい微笑みを浮かべているムートに、笑顔を返す。

「そっか…ありがとう、シリウス、ムート」

素直に感謝の言葉を言うと、シリウスが何時もよりも柔らかな笑顔で頷いた。そして軽く俺の頭を叩くと、その鮮やかな緑の瞳を、レガートに向けた。

「それで君は、冒険者志望じゃあないのか？」

その問いかけに、俺もレガートを見た。この質問は、俺もしたかった質問だからだ。

レガートはシリウスの問いかけに、ゆるり、と微笑んだ。緊張も無い、気負いも無い、自然な笑顔だ。

「冒険者志望です。ツアイトと一緒に、ご指導お願いします」

ああ、どうしよう。正直、嬉しい。

レガートの言葉に、シリウスが愉快そうな笑顔で頷いた。

「2人まとめて、一人前の冒険者にしてやるっ」

こうして、俺とレガートの冒険者の師匠達が出来た。

朝食を終え、武器の店が開く時間まで宿屋の食堂でのんびりと冒険者についてレガートと一緒にシリウスとムートに話を聞いていると、シリウスが突然両手を使って俺の体を撫でた。

ロッコを飲みながらクッキーをつまんでいた俺は危うく噴出しそうになり、なでなでと触ってくるシリウスから逃れようと身をよじる。

「なっ…んだよ、シリウス。ってかくすぐつたいから！」

「うーん…」

ロッコの入ったマグカップを置いて、未だに触ってこようとするシリウスの手を止めようと手を伸ばすが、逆にその手を取られ、するりと服の上から腕を撫でられた。

思わずレガートに助けを求めると、レガートはシリウスの行動を見て固まっていた。ああ、うん、そうだな。レガートは山で祖父と暮らしていたから、こういう友達同士でやるようなスキンシップ系にまだ耐性が無いのだろう。

レガートの助けは得られないと分かった俺は、シリウスから逃げようと手を引っ張ってみるが、流石は冒険者、びくともしない。

と、そこでシリウスが割りと真剣な表情で俺の腕を見ているのに気がついた。

「シリウス？何なんだよ」

小首を傾げて尋ねると、シリウスは真剣な表情のまま俺の腕の袖をまくり、白い俺の腕を確認するように触って撫でた。

そこでようやく気がすんだのかシリウスは撫でるのをやめて、じろり、と俺に鋭い緑の瞳を向けた。

「ずっと思ってたんだが、ツアイト、隠し事があるな？」

「隠し事？」

尋ね返すとシリウスは視線を俺の腕に落とし、腕を掴んでマッサージをするように感触を確かめるようにふにふにと触りながら、納得いかない、という表情を浮かべた。

「剣を始めたのは最近なんだろ？にしちゃあ、体が出来てる。けれど変に柔らかいところを見ると、筋肉はそこまでついて無いようだ。となると、”何か”あると考えられるわけだ」

シリウスは俺の腕を放すと、一言、こう言った。

「ツアイト。話せ」

狼の眼光のごとく鋭いシリウスの瞳に、冒険者にもなっていない俺が逆らうことができるはずもなく、俺が落ちた異世界人だということをシリウスとムートに話すことになった。

そして俺の話を聞いたシリウスは物珍しそうに、ムートは驚きの表情で俺をまじまじと見た。

「『落ちた異世界人』ねえ……」

「話には聞いたことがあるが…この目で見ようとは」

流石は冒険者。落ちた異世界人の事は知っているらしい。

「なるほどな。それでその体か。まあこうして会ったのも何かの縁だろ。遠慮なく頼れ」

シリウスはそう言って直ぐに何時もの笑顔を浮かべて、俺の頭をぐりぐりと撫でた。ムートを見れば柔らかな表情で頷いてくれて、やっぱり、この2人は優しいなと思う。

俺がありがとう、と2人にお礼を言っていると、何か考える仕事をしていたレガートが顔を上げた。

「シリウスさん、そんなにツアイトは目立つでしょうか。その、体とか、動作とか…」

「ん？いや、俺もツアイトから、剣を始めたばかりって聞かなくや気にしてなかっただろうな」

「それじゃあ、剣でも下げとけばバレない？」

「下げるだけならな。剣を抜きや嫌でもその技量が分かる」

そこでシリウスは一旦言葉を止めて、納得したように頷いた。

「…そうか、落ちた異世界人だって事はあまり多くの人間に知れないほうがよさそうだな」

「はい。国によっては、わざと落ちた異世界人を作ろうとする所もあると聞いたことがありますし…」

そんな国もあるのか、と少し呆れた気分で話を聞いていると、シリウスがレガートの言葉に眉を顰めたのが見えた。でもそれもほんの一瞬で、シリウスはレガートから視線を外して向かいの席に居るムートを見上げた。

「ムート。ツアイトをアリシアにみせたほうがいいと思うか？」

シリウスの言葉に、ムートはひとつ頷いた。

「特に不調は無さそうだが、念のため、その方がいいだろう」

そのムートの言葉にシリウスが頷き返していると、レガートがシリウスに声をかけた。

「シリウスさん、アリシアというのは…？」

「俺とムートの冒険者仲間で、魔法使いだ。超一流、とまではいかないが腕の立つ信用の置ける奴だ。安心しろ」

にっと笑みを浮かべるシリウスに、なるほど、と俺とレガートが頷く。

魔法使い。ファンタジー好きとしてはその言葉にそそられないわけがない。

しかし、そういえばシリウスは魔法を使うことは出来ないのだろうか。不思議に思っ、尋ねてみることにした。

「なあ、シリウスは魔法は使えないのか？」

「ん…？ああ、そうか。こっちの魔法の事も良く知らないんだな？」

問いかけるとシリウスの方が一瞬不思議そうな顔をして、直ぐに納得したようにうなずき、視線をレガートに移す。

「レガートはどれぐらい知ってるんだ？魔法の事は」

「町の皆知ってるぐらいには…。ただ、俺は魔力測定はしたことが無いんです」

「なるほど？んじゃあれガートも、ついでにアリシアに見てもらえ。そっちの資質があるんなら、多少覚えておいて冒険で損になる事はねえからな」

多少言葉の端々から内容を読み取って推測することはできるが、

2人の話しではどういう前提があるのか中々見えてこない。置いてけぼり感を感じつつ、首を傾げるとシリウスがくすりと笑って俺の頭を撫でてきた。

「俺は専門家じゃねえからそこまで詳しい話は出来ないけどな。簡単な説明になるんだが、まず魔法使い、イコール、魔法、ってわけじゃあない」

「魔法使えるから魔法使い、って訳じゃないのか」

「その通り。もしそうなら、この宿の店主だって魔法使いって事になっちまうからな」

そう言いながらシリウスが指差したのは、宿の中に灯されている多くのカンテラの明かりだ。この宿のカンテラの中には蠟燭が入っておらず、何か石のような物が入っているのを見たことがある。それは町中の街灯も同じで、レガートから街灯のカンテラに灯されているのは魔法の明かりだと聞いたことがあるのを思い出した。

俺はなるほど、と頷いてシリウスに先を促した。

「魔法ってのは世界に満ちる力を借りて起こす力、現象だ。簡単な例えをすると、普通なら火を灯すなら薪や蠟燭を用意して火打石やらなんやらが必要になるだろ？その過程をすつとばして火を灯し続けるようなのが、魔法だ。奇跡と言う奴もいるな。で、魔法を使うには何が必要なのかといえば、魔力と魔法式があればいい」

「あれ、それだけでいいの？」

「基本的にはな。だがもっと高度な魔法を使うなら、高い集中力：人間の精神力だな。それが必要になる。アリシアが、”人の感情や心というものが持つ力は世界と繋がるのに必要不可欠な力”、だとか言ってたな。まあその辺りの詳しい話はアリシアに会った時に聞け」

「うん、分かった」

シリウスの言葉に、俺は頷く。とても興味深い話した。アリシアという魔法使いに会うのが一層楽しみになってきた。

そのわくわくした俺の様子を感じ取ったのか、シリウスの表情に僅かに苦笑が交じるのが見えた。

「で、世の中には魔力を多く持つ者と持たない者が居る。多く持つ者は魔法式を描くだけで魔法を使うことができるが、逆に小鳥の涙ほどにしか持たない者はどうするのか。そこで魔石の出番だ」

「あ、そうか。魔石って魔力を含んだ石のことだから、後は式があれば魔法は誰でも使うことが出来るのか」

「聡いな。その通りだ。宿の明かりや町の明かりが勝手に灯されるのは、魔法式に”暗くなったら灯せ”という式が刻み込まれてるからだ」

「なるほどな」

シリウスの説明に納得しつつ、少し地球の機械にも似てるな、と思った。命令と動作に必要な電力は、魔法式と魔力に置き換えられるからだ。でも似てるだけで、色々な部分は多く違うのだろう。高度な魔法には人間の精神力が必要になる、という部分もとても気になる。

「じゃあ魔法使いって言うのは、どういう人の事を指すんだ？」

「魔力を多く持ち、魔法式を自分で作り出して使うことの出来る者のことをそう言う。ま、魔法の専門家ってよりも研究者だな。あいうのは。実際、新しい魔法式を作り出すのは大抵が魔法使いだ。自分で魔力持つてるから、描いた式が実際に発動するか確かめやすいしな」

自分で魔法式を作り出す。その何と魅惑的な響きか。

今まで以上にわくわくしながらシリウスの話しに相槌を打っていると、ふと、シリウスが思案する仕草をした。

「そいや此処はソヴァールだっけか。精霊使いの話しもしとくか」
「ああ、そういえばソヴァールは精霊使いが多いんだっけ」

以前レガートが話してくれたソヴァールの歴史を思い出す。精霊に愛された国、ソヴァール。レガートから聞いた時は、場所によって呼び方が違うだけで、魔法というのは精霊から力を借りているものだと思っていた。しかしシリウスの今の言い方から、精霊と魔法は違うものようだ。

説明してくれるのかとシリウスを見れば、シリウスはレガートに視線を向けた。

「よし、レガート。頼んだ」
「え？」

突然話を降られ、驚くレガートにシリウスはニヤリと笑みを浮かべる。

「この国出身の方が詳しいだろ？それに知り合いにまだ精霊使いが居なくてな」

言っていることは筋が通っているように聞こえるが、その顔に浮かぶのは悪戯を仕掛けた悪ガキのようだ。整った顔立ちに、狼が笑ったようなその表情は非常にかっこいいが、非常に悪そうだ。レガートを見ると、少し呆れたような怒ったような様子をしている。

悪戯好きの悪ガキと、それをよく叱る委員長。そんな構図が一瞬浮かび、レガートのためにそっと、頭の中から消した。

ジト目でシリウスを睨んでいたが、レガートは気を取り直して、

こちらに視線を向けた。

「精霊使いというのは、そのまま精霊の力を借りてその力を使う人の事を言うんだ。魔法は世界に満ちる力を式を使って様々な形にするけれど、精霊というのは様々な世界の力の結晶から生まれた存在。例えば燃え盛る炎だったり、冴えた清らかな水の流れであったり、天を貫き震わす雷であったり。そういう力の、純粋な力が凝縮して、そこに意思が生まれたのが精霊、っていうと分かりやすくなるかな」

「ほお。魔力が意思持ったようなもんか」

レガートの話しに頷いていた俺の横で、シリウスも感心したように頷く。

「イメージ的にはそういう感じです」

「あれ、でも待った。力が意思を持つてゐるってことは、暴走とかしたりするんじゃないのか？」

シリウスに頷くレガートに、俺は首をかしげて見せる。力が意思を持ち、それを自分の意思で好き勝手に使うことが出来るとしたら、何だか容易くその力を暴走させてしまいそうな気がする。止めるにしても、肉体がないのならとても難しそうだ。

しかしその疑問に、レガートは柔らかに微笑んだ。

「そこは大丈夫。精霊が持つ力っていうのは、3種類あるんだ。1つは力の循環。その場にいるだけで、自分が持つ属性の力の流れをよくしてくれる。2つ目は加護の力。気に入った人間や、動物、あるいはその土地とか石に自分の力の加護を与える。加護を与えられたものは、与えてくれた精霊の力の属性を帯びて、力や守りが強くなるんだ。そして3つ目は契約。精霊はね、その体自体がとても

高濃度の力の塊だけれど、その実、自分でその力を使うことは出来ないんだ」

「自分で力を使うことが、出来ない？」

「うん、そう。例えば……」

俺が思わず問いかけると、レガートはテーブルの上に視線を彷徨わせて、透明なガラスのコップを2つと、水の入った金属のポットを手に取った。

そして俺の前にコップを並べて置くと、片方にゆっくりと水を注ぎ始めた。

「このポットが自然に発生した強い力。そしてこの水が、強い力から生まれてきた純粋な力の塊。これが1つの場所に集まって、」

ぴたり、とコップから水が溢れるか溢れないかのところで、レガートが注ぐのをやめる。

「精霊になる」

次にレガートは、水が並々と入ったコップから、何も入っていないコップの方に、コップの水を移し変えはじめた。

「でも精霊は、自分一人ではその力を工夫する事は出来ないんだ。このコップに移されてく水を凍らせたり、別の飲み物に変えたりとかね。精霊ができるのは、こんな風に自分の中の力を分け与えるだけ。純粋な力の塊だからこそ、工夫といった事が自分では出来ないようなんだ」

2つのコップに注がれた水が半分づつになるぐらいでレガートは手を止めて、コップをそつと、テーブルに置いた。

俺はその様子を眺めながら、なるほど、と頷く。水は水、炎は炎以外の何者にもなれないように、精霊もまたその質を変えたりする事が出来ないのだろう。

「それでも、純粋な力の塊なんだろう？暴走して大爆発して、周囲のものが吹き飛んだーっていうのは無いのか？」

「うん、それも大丈夫。ええとそうだな…このポットの口みたいに、自分で出せる力の上限が決まってるようなんだ。ポットは勢いよく注ぐこともできるけれど、口が狭いから一定以上の勢いでは出ないよね？」

「ああ、なるほどなあ」

レガートの説明に納得して頷く俺の頭に、ぎゅむ、とシリウスがその逞しい腕を置いた。いや置くな、こら。

「ほー…意外に奥が深いんだな、精霊って」

「シリウスは知らなかったのか？」

「詳しくはな。時々気まぐれに人間に力を貸したり、特殊な土地を作り出すような、力のある存在ってぐらいの認識だな」

「俺もそのぐらいの認識だった」

話すシリウスに、ムートも同意して頷く。

それを見ながら、俺はシリウスの腕をどかしつつ、今まで聞いた話を頭の中で纏めた。

「精霊は純粋な力の結晶で、自分の意思では自分の力を工夫したりは出来ない、と。その工夫したりするのが、人間側の力、って事か？」

俺の出した答えに、レガートは満足そうに微笑んだ。

「その通りだよ、ツアイト。魔法は魔力と式があれば発動するってシリウスさんから聞いたけれど、精霊魔法も基本的にはそういう仕組みなんだ」

そのレガートの言葉に、俺はピンと来た。

「あ、分かった。魔力の代わりに精霊の力を借りて、人間側が式を用意してそこに力を流して込んでもらうんだな？」

「そう！ツアイトは飲み込みが早いね」

レガートは嬉しそうに頷いて、補足、と言葉を続けた。

「精霊使いは精霊に気に入られて加護を得たり、魔法で呼び出して契約したりすることで、精霊と心を通わせられるようになるんだ。そしてその精霊に合わせた式を作り出して、そこに精霊の力を引き出して注ぎ込む。そうすることで、強力な魔法を使うことが出来るりするんだよ」

「なるほどなあ…。ありがとう、レガート。分かりやすかったよ」「どういたしまして」

丁寧に分かりやすい説明してくれたレガートに感謝して微笑むと、レガートは嬉しそうに微笑み返した。

そんなレガートにさらに俺が和んでいると、シリウスとムートが一言、こんなことを言った。

「…花畑が見える」

「俺もだ、シリウス」

こちらの世界にも天国のお花畑というのがあるのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4358y/>

ツァイトさんの異世界冒険記

2011年11月25日04時45分発行